

$$\frac{\partial h_0^{ij}}{\partial t} = \nu(\Delta_\xi + \Delta_\eta) h_0^{ij} + K_0^{ij}(\mathbf{h}_0)$$

なる一様等方性乱れと同一の方程式が得られ、そのグリーン関数 G と表現 $h_0^{ij} = D_{ij}Q$ とにより \mathbf{h}_1 もまた具体的に

$$h_1^{ij}(\xi\eta t) = \left(\frac{\partial U^m}{\partial Y_t} + \frac{\partial U^l}{\partial X_m} \right) \int_0^t ds G^{ijlm}(\xi\eta ts) Q(s)$$

と表わされ、その結果例えば乱流応力について $R^{ij} = \gamma_0 \delta_{ij} + \gamma_1^{ijlm} \left(\frac{\partial U^m}{\partial x_l} + \frac{\partial U^l}{\partial x_m} \right)$ という各種のモデル方程式に採用されている型式が出現する。

記号: t = 時間 $x_i, i=1, 2, 3$ = 空間座標, p = 圧力の乱れ $R^{ij} = \langle v^i v^j \rangle$, ν = 動粘性率, $M_{ilm} = \frac{1}{2} \left(D_{im} \frac{\partial}{\partial \xi_l} + D_{il} \frac{\partial}{\partial \xi_m} \right)$, $D_{im} = \delta_{im} - \frac{\partial}{\partial \xi_i} \Delta_\xi^{-1} \frac{\partial}{\partial \xi_m}$, $\Delta_\xi = \frac{\partial}{\partial \xi_l} \frac{\partial}{\partial \xi_l}$, $\bar{\rho} = \text{const.}$ $e^{-\frac{1}{2} \int h^{em(\cdot)} u^{l(\cdot)} u^{m(\cdot)}$, $iL_0 = \int N_0^l(\cdot) \frac{\delta}{\delta u^l(\cdot)}$, $\text{tr}\{\dots\} = \int \dots \delta \mathbf{u}$, p = 射影子, $pF(\mathbf{u}) \equiv \text{tr}\{pF\} + u^l(\cdot) \text{tr}\{\bar{\rho} e^{lm}(\cdot) u^m(\cdot) F\} + \int (u^l(\cdot) u^m(\cdot) - h^{lm}(\cdot)) \text{tr}\left\{ \frac{\partial \bar{\rho}}{\partial h_{lm}(\cdot)} F \right\}$, $e^{ij} = (h^{-1})^{ij}$.

消費生活の指標について

坂元慶行

「日本人の国民性調査」の今後の発展のためには、経済感覚、消費行動、経済社会的地位指標等、経済生活に関する指標を補充し、これらの指標と価値観との関連分析を可能にすることが重要な課題の一つである。このためには、既存の所内外のデータを収集・再分析し、態度・価値観の説明に有効で、かつ、調査可能な項目を選定することが必要な予備作業であると考えられる。ここでは、その第一段階として、首都圏 30 km 圏で実施された日本消費経済研究所の「消費者の意識行動調査」の 2 回のパネル調査（昭和 58 年 6 月-59 年 1 月調査（890 サンプル）と昭和 59 年 6 月-60 年 1 月調査（840 サンプル））に基づいて主として回答結果の「安定性」について検討した。

この調査は、消費に関わる価値観、景況判断、家計の現況とその評価、消費計画と行動（結果）、属性（性、婚姻形態、学歴、職業、世帯上の地位、世帯員数、ライフ・ステージ、住宅状況、住宅ローンの有無、住宅購入計画、年収、年間貯蓄額、貯蓄総額、月間生活費、月間貯蓄可能額、望ましい生活費等）から成っている。

前・後調査の半年間の状況変化に基づく回答変化に配慮して、20 の再調査項目の各々を目的変数、前・後調査の残り全ての項目を説明変数群とみたとき、前調査の同一項目がどの程度の説明力を持つか（「安定度」と仮称）を、CATDAP を用いて、検討してみた。その結果、経済関係の属性項目では年収、貯蓄総額、月間生活費が抜群であり、年間貯蓄額等は「安定度」が低い。一方、意識項目では、「くらしむぎに対する満足度」、「収入は世間並み以上にふえたか」、「日常生活での経済的不安感」の「安定度」が高い（ただし、「経済的不安感」の情報は「くらしむぎに対する満足度」の情報に含まれることが多い）。これに比して、「くらしむぎは去年よりよくなったか」、「1 年後のくらしむぎの見通し」、景気観、物価観等の「安定度」は低い。しかし、調査環境の悪化は回収サンプルの属性項目の「安定度」の低下を必ずしも帰結しないようで、経済関係の属性項目の「安定度」は予測以上に高い。

なお、「くらしむぎに対する満足度」は「政治に対する満足度」や「収入と余暇時間のどちらをふやしたいか」といったいわば「国民性」型の質問文に対して最も強い関連を持つことが見られた。従って、年収、貯蓄総額、「くらしむぎに対する満足度」等は今後の基本的属性の項目選定に当たって再検討に値すると思われる。